

---

# ポップの極楽大冒険！

ポストマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポップの極楽大冒険！

### 【Nコード】

N7431U

### 【作者名】

ポストマン

### 【あらすじ】

大魔王に挑む勇者の一人には、秘密があった。

彼は別の世界を駆け抜けた英雄だった。

全ての記憶を無くし、それでも全てを守りたいという『意思』は残っていた。

これは、そんな彼の旅の軌跡を綴った物語である。

## プロローグ（前書き）

久しぶりに『ダイの大冒険』を読みながら、これのSSを書くこと  
思いました。

せっかくなのでクロスものにしようと思い、作品とジャンルはくじ  
引きにした。

結果、作品は『GS美神』でジャンルは『転生』。

……とてつもなく無理と思いながら書いてみました。

## プロローグ

見渡す限りの荒野。

全てが死に絶え、無に還った世界。

「横島さん……」「横つち……」

光を背負った二人の前に居るのは、死にかけた青年。

「……神魔の最高指導者か、何の用だ……」

横島と呼ばれた青年は、彼らに問いかける。

「すまん横つち。わいらは結局、この世界を守ることができんかった」

「ええ……あなたとルシオラさんが残してくれた世界だというのに……」

二人はそろって、横島に頭を下げる。

「今更どうでもいい事だ……」

横島はそう言いながら、今までのことを思い返す。

初めは、神族過激派の襲撃だった。

人魔となった横島を穢れた存在とし、それを粛清しようとしたものだった。

横島はこれを何とか逃げ出したが、これにより神魔の間に亀裂が入った。

デタント派は関係を修復しようとするも、双方の過激派によってその話し合いは破綻。

一気にハルマゲドンへと突入してしまった。

人間界でも被害は増え始め、横島やその仲間たちはこれを食い止めるようとする。

しかし、全ては遅かった。

神魔は双方の最終兵鬼による攻撃を行い、ほぼ全ての神・魔・人・妖はその魂魄ごと滅んだ。

残った神魔は横島こそ全ての元凶とし、最後まで襲っていたのだ  
た。

「…これから、どうするんだ…？」

「私たちはこの世界に括られていますから、もうすぐ滅ぶでしょう」  
「でも、横つちまでそうなる必要はあらへん」

「…？」

「横島さん、どこか別の世界へ転生しませんか？」

「せや、横つちには何の罪もあらへん。せめて人として幸せになっ  
てもらいたいんや」

神魔の最高指導者の話に、横島は考えこむ。そして、

「みんなの遺言だったからな……。『幸せになれ』って」  
横島はそれを受諾した。

「わかりました。では横島さん、あなたの魂を送ります」  
「元気で、幸せになるんやで」

その言葉を最期に、横島は息絶えた。  
享年二十七歳。

この世界の最後の一人は、文字通り『この世』を去った。

## プロローグ（後書き）

主人公、どうしようかと悩みました。

いつそのこと『勇者でろりん』で、とか『オリ主』とか、何度思ったことか…

結局横島は『あの人』に転生してもらいました。

……何故か妹は『レオナ』とか言っていました…

## 第一章 始まり（前書き）

連続投稿です。

もちろん主人公は『レオナ』ではありません。

## 第一章 始まり

「…おい、何やってんだ」

「見りゃわかんだろ。体鍛えてんだよ」

そう言いながら少年は棒を振り回す。

「詰まらん事してないでとっとと店番しろ！ほれ！」

「いてっ！ちょ！耳、耳がちぎれるって！」

「まったくこの二人は…。ほらポップ、私たちは出かけるからちよつと店番してなさい」

俺の名はポップ。

このランカークス村唯一のしがない武器屋の息子だ。

毎日代わり映えのしないこの村で、今日も店番をするはめになっていた。

「まったく、店番してても客なんて来やしないうつてのに」

頬杖をつきながら、いつものように愚痴をこぼす。

「……何で、こんなにも気になるんだろうな…」

俺にはただひとつだけ、他の人と違うところがある。

いつも見ている夢だ。

何かと戦っている俺。

俺を励ます仲間らしき誰か。

仲間らしき誰かを殺す何か。

俺はこんな夢を小さい頃からよく見ていた。

「よお、相変わらず暇そうだな」

扉を開けて入ってきたのは、俺の幼馴染のアドルだった。

「んだよ、また冷やかしに来たのか？畑仕事手伝わねーとまたおやつさんに怒鳴られるぞ」

「暇なダチの為に来てやったのになんだよ。それよりこの銅の剣をくれよ」

「百ゴールドだ。これってやっぱあの盗賊対策か？」

最近、ここからそれほど離れていない所で盗賊が暴れているという噂があった。

このあたりにはまだ被害が出ていないが。

「ああ、噂だとちよつとずつこつちに近づいているらしいぞ」

「最近物騒になってきやがったな。親父達もその対策に出かけてんかな？」

「多分そうだろうな。ジャンクさんも少しは戦えるからな」

「俺も呼ばれるかな？」

「いや、それはない」

あっさり否定された。

「っとと、そろそろ戻らねえと。んじゃな」

そう言つてアドルは帰つていき、入れ違いに親父達が戻つてきた。

「どうだポップ、何かあつたか？」

「アドルが剣買ってただけだよ。後は何もねえ」

「そうか」

それから親父に色々聞いたが、今日の集まりはやっぱり盗賊の事だった。

「いいかポップ、何かあつたらステイー又とここに居るんだぞ」

「俺も少しは戦えるつて。俺も」

そこまで言いかけた時、店の扉が開いた。

「すいません、この剣を研いでいただきたいのですが」

後に思えば、この日が俺の冒険の最初の一步だった。

## 第一章 始まり（後書き）

これを書いていて、共通点に気がつきました。

横島もポップの共通点

- ・ バンダナをしている。（横島は赤、ポップは黄色）
- ・ 女好き（程度の差はあるが）
- ・ 意外と頼りになる。
- ・ ムードメーカー。
- ・ 咄嗟の機転が利く。
- ・ ビビリでへたれな所がある。
- ……意外と多い。

実は過去にも同じようなSS書いている方がいらっしやるのではな  
かるうか…

## 第二章 盗賊

俺は今、森の中で一人の人を追跡している。  
その相手はさつきうちの店に来た客だった。

気難しい俺の親父が、代わりの剣と行ってうちで一番の剣を貸した  
この人が、どうにも気になって仕方なかった。

(いったいどこまで行くんだ?)

そう思いながら、俺は好奇心の赴くままにその人ーアバンさんを追  
いかけた。

着いたのは、少し森が開けた所だった。

アバンさんはそこで岩に向かって剣を振り下ろしていた。

自己鍛錬をしているようだった。

振り下ろしたとおりに岩が切り裂かれる様子に、俺は魅せられてい  
た。

(すごい……)

やがて剣をしまうと、アバンさんはその場で目を閉じて佇んだ。

「……そろそろ、出てきたらいかがですか?」

アバンさんの声に、思わず我にかえってすくみ上がる。

(やべっ! 仏罰は…、って、仏罰って何だ?)

脳裏に女の人を浮かべながら、アバンさんの前に行こうとしたとき、

「けっけっけ、こんな所に一人たあついてねえ奴だな」

「おい美形さんよ。悪い事あいわねえ、身包み置いていきな」

反対側の茂みから、がらの悪そうな数人の男が姿を現した。

すぐに分かった。こいつらが噂の盗賊たちだ。

「ああ、あなたたちがこのあたりで噂の盗賊さんですね」

「おうよ、俺たちがその噂の盗賊よ。分かったら全部置いてとっと

と失せな。命だけは勘弁してやるぞ」

「それはできませんねえ。そもそも、私を生かして帰すつもりなど無いのでしょうか?」

「けっ、よく知ってるじゃねえか。おい、やるぞ!」

一人がそう言うと、周りの盗賊は一斉に襲い掛かった。

そこからはすごかった。

アバンさんは鞘に入ったままの剣で盗賊たちをあっさりと叩き伏せてゆく。

その場に残ったのは、気絶した盗賊たちとアバンさんだけだった。

「さて…、すみませんその少年。彼らを縛る縄を持ってきてもらえませんか?それとどなたか大人の方を呼んできてください」

「ひゃ、ひゃい!」

吃驚して変な声で返事をしてしまった。

「親父!縄を持って来てくれ!」

「どうしたポップ!藪から棒に」

「さっきのお客さんが盗賊たちをやっつけたんだよ!」

「なんだって?!分かった、縄は用意しておくからお前は他の奴らにも声掛けて来い!」

そう言いながら大人たちを集めて戻った。

「こりやおでれ!」

「ありがとうございます、これでわしらも安心できます」

「いえいえ、ベリー困っている人に手を貸すのは当然の事ですよ」  
親父たちはアバンさんにお礼を言いながら盗賊たちを縄で縛ってゆく。

俺は邪魔にならないように少し離れたところでそれを見ていた。

(やっぱ凄いなアバンさんは。俺を弟子にしてくれないかな?)  
そんな事を考えていたら、後ろで物音がした。

「！！いけません！」

後ろを振り向くと、盗賊の一味が俺に向かって剣を振りかぶっていた。

瞬間、時間の進み方が遅くなる。

（盗賊？！俺、死ぬのか？嫌だ、死にたくない！  
の為にもし）

「うわあああつ！」

思わず、盗賊に向かって手を突き出す！

キーン！

「くくく！」「くくく！」

盗賊の剣は、俺に届いていなかった。

……俺の手の前にある、六角形の小さな光る盾によって。

「はっ！」

「げぶつ！」

その隙に、アバンさんは盗賊の鳩尾に拳を入れていた。

「ふう、油断してしまいましたね。大丈夫でしたか？」

「え、あ、はい！」

「ベリーグッドな返事です。それより、今は一体なんですか？」

「いや、俺もわからないんですけど……」

「そうですか」

そう言いながらアバンさんは、気絶した盗賊を担いでいった。

それが、俺の不思議な能力を自覚した瞬間だった。

## 第二章 盗賊（後書き）

いくら生まれ変わろうとも、横島は横島だと私は思います。  
ですから、こんなこともできてしまいます。

もちろんこれは「サイキックソーサー」ですよ。

### 第三章 デルムリン島（前書き）

ようやく原作部分突入です。

### 第三章 デルムリン島

あれから一年、俺はアバン先生の元で旅をしながら修行していた。あの後、俺はアバン先生に『弟子にならないか?』と誘われた。

俺はその日のうちに親父達にその事を話した。

最初は反対されて、いつそのこと黙って出て行こうとした。

けど、何故か俺はそれをする事が出来なかった。

親不孝な事をしたくなかった。

結局アバン先生が旅立つ前日まで説得して、何とか許してもらえた。

そして俺は今―

「いけませんね、あまりよくない状況ですよ。ポップ、もう少し急ぐことは出来ませんか?」

「そう言うなら先生も漕いでくださいよ!」

「はっはっは、それではポップの修行にならないじゃないですか」  
全力でボートを漕いでいた。

向かう先は『怪物島』デルムリン島。

先生曰く、あそこには将来の勇者が居るらしい。

その島では、モンスターたちが互いに争いあっていた。

「いけませんねえ、ポップ、すぐに戻るのでここで待っていてくださいよ。とおおーっ!」

先生は剣を地面に突き立てると、どこかに走り去っていった。

「おぬしら、何者じゃ?」

その声に振り向くと、ふらつく鬼面道士と少年が居た。

恐らく、この少年が先生の言っていた勇者候補なのだろう。

「ああ、俺の名前はポップ。今走っていったのは俺の先生だ」

「俺はダイ。そうだ、みんなを助けて!みんな本当はいい奴ばかり

なんだ、だから」

ダイが勢い込んで喋り出す。よほどあのモンスター達が心配なんだろう。

俺は安心させるように、頭を撫でる。

「大丈夫だって、俺の先生が絶対何とかしてくれるから、な？」

「う、うん」

……なぜか、脳裏に白い狼？の姿が浮かぶ。

そうこうしている内に、先生が戻ってきた。

「ちよわーっ！つと、戻りましたよ」

「あ、おかえりなさい先生」

「さて、ではよく見ているんですよ？むうっん！」

先生が魔力を高めると、島全体に五紡星が浮かび上がる。

「邪なる波動よ、退け！《マホカトル》！」

先生の魔法によって、島全体に聖なる結界が展開される。

「凄い……」

「なんと、見事な……」

「言っただろ、先生なら何とかしてくれるって」

砂浜でそれぞれ自己紹介をしていく。

「さて申し遅れましたが、私はこういう者です」

「ふむ……、勇者の家庭教師、アバン殿ですか……」

「ええ、そうです。この度は PAPNIC 王国のレオナ姫に、こちらの

ダイ君を立派な勇者に育て上げて欲しい、と頼まれました」

「えっ、レオナが？！元氣だった？」

ダイが身を乗り出して聞いてくる。

なんだか犬みたいな奴だな。

「ええ、お元氣でしたよ」

「そっか、よかったあ」

「では……、と、その前にポップ」

先生が島の外を見ながら俺を呼ぶ。

「は、はい！」

「こちらにホークマンが近づいてきています。あなた一人で相手をして来なさい」

「ええっ！」

先生と同じ方向を見ると、確かに二つの影が見える。

「何事も修行です」

「はい！」

俺は一人結界の外に出ると、ホークマンたちを迎え撃つ。

「なんだあこの小僧は？」

「おい、それよりもあつちを殺るぞ」

奴らはプラスさんたちを狙い始めるが、結界に阻まれて何もできないらしい。

「くそっ、おいあつちの小僧から殺るぞ！」

「へっ、やられてたまるか、《ヒヤダルコ》！」

俺が呪文を唱えると、広げた両手から猛烈な冷気が飛び出す。

けれど、ホークマンたちの内の一体しか倒せず、もう一体を怒らせるだけだった。

「いてえじゃねえか！《マホトーン》！」

「げえっ！」

「いけませんねえ、いつも言っているでしょう？《マホトーン》には気をつけなさいと」

あっさり呪文を封じられた俺は、奴らの攻撃をかわしながら先生に説教される。

悔しいけど、その通りだから何も言えない。

「ではポップ、戻ってきなさい。残りはダイ君に頑張ってもらいましょう」

「え、俺?!」

「ええ、せつかくですから生徒の実力を見せていただきますよ」

……結果は驚いたものだった。

ダイの素早い一撃で、ホークマンは真っ二つになったのだから。

「すげえなお前って」

「やはりレオナ姫のめに狂いはありませんでしたね」

こうして、ダイは俺の弟弟子になったのだった。

### 第三章 デルムリン島（後書き）

戦闘描写下手すぎ……

もう少し上手になりたいです。

## 第四章 修行（前書き）

今回は文章少なめです。

## 第四章 修行

ダイが修行を始めてから三日目。

俺たちはとある洞窟の中にいた。

「さて、ではこれからここで今日の授業を始めますよ」

「はい！」

「まずはおさらいです。ダイ君はすでに《大地斬》を使えますが、あとの二つは何でしたか？」

「え〜と、《海波斬》と《空裂斬》です」

「グッド。ではこれよりダイ君には《海波斬》を会得してもらいます。《海波斬》は力の技《大地斬》に対してスピードの技です。それを頭に入れておいて下さい。では、いきますよお〜」

そう言つと、先生は煙に包まれた。

煙が晴れると、そこには一匹のドラゴンが居た。

「え？え？せ、先生がドラゴン？」

「ありや先生のドラゴラムの呪文だ！」

『そのとおりです。さあ、私を倒して見せなさい！』

「うん！いくぞ、《大地斬》！」

ダイが先生に斬りかかるが、ドラゴンの肌には掠り傷すらつかない。攻めあぐねていると、先生は火の息を吐いて……、つて！

「あつちや〜〜！」

俺まで被害が来た。

「ちよ、先生！何で俺まで！」

『これも修行ですよポップ。あなたなら簡単によけられるでしょう？』

いや確かによけるのはできますが、俺って魔法使いですよね？

このままでは埒が明かないので、閃熱呪文で火の息を遮りながらダイに指示を飛ばす。

「今だダイ！このプレスを斬るんだ！」

「わかった、いくぞ、《海波斬》！」  
ダイの一撃が空を裂いて先生に襲い掛かる。そして、  
『あいたあっ！』  
先生の鼻先を切り裂いた。

「あいたたた、よく出来ましたねダイ君。そう、それがスピードの技、《海波斬》です」

「いやったあ〜！」

「それにポップもよく出来ましたね。まさか《火炎の息》を遮るとは」

「へ？あれって《火の息》じゃ？」

「どうやら威力を見誤っていたようです。」

「そうこうしていると、ブラスさんとゴメがやってきた。」

「おお、もう終わりましたか。さき、昼食の準備が出来ていますぞ」

「ピイツ、ピイ！」

「そうですか、ではお昼を……！！！」

その時、結界が激しく震えだした。

「これは一体……！いけません、二人ともすぐにここから出ましょう！」

「そう言いながら来た道を引き返したが、すでに出口には人影があった。」

「ふふふ……、久しぶりだなアバンよ」

「なっ、お前は！」

「倒したはず、か？あいにくだがお前を倒すために黄泉返って来たぞ！」

「魔王、ハドラー……！！！」

「……ええっ……！！！」

思わずハドラーを見るが、確かにそれらしい威圧感があった。

「こんな所で家庭教師とはな。変わり果てたな《勇者アバン》！」  
「そ、そうじゃったか…！どこかで聞いた事のある名前じゃったが、  
あなたがあの勇者様じゃったか…」  
「…それは昔のことです。それよりあなたはほとんど変わっていない  
いようですね、《魔王ハドラー》！」  
「今の私は魔王ではない！《大魔王バーン》様の配下、《魔軍司令  
ハドラー》だ！」

## 第四章 修行（後書き）

ここまで書いて難問がひとつ。

……ポップのお相手はどうしましょうか？

本命・マアム、対抗・メルルで考えているんですけど……。

妹おすすめの「ダイ×ポップ」とか「ヒュンケル×ポップ」は無視  
します。

…いつそのことハーレムで行くべきか…

## 第五章 魔軍司令（前書き）

皆さんからのお言葉が耳に痛いです…

しかも弱点にクリティカルヒットするような内容…

それでも何とかがんばります。

## 第五章 魔軍司令

「落ちぶれたものですね、元魔王殿？」

「ふん、何とでも言え。俺はバーン様から強靱な肉体と魔力を頂いたのだ。もはや貴様など足元にも及ばん」

「さあ？それはどうでしょう？」

先生は軽口をたたくが、威圧感は薄れない。

「先生！俺たちも！」

俺とダイは先生に駆け寄ろうとするが、

「いけません！アストロン！」

「な?!」

それよりも早く、俺たちの体が鋼鉄となってゆく。

「先生?!」

「いいですかダイ君、ポップ。今のあなたたちではハドラーには敵わないでしょう」

先生は優しい表情で語りかけてくる。

「ダイ、あなたは素晴らしい才能を持っています。このまま研鑽を続ければ必ず立派な勇者になれるでしょう」

「アバン先生……」

「そしてポップ、あなたも私が誇れる立派な生徒です。少し早いですが、二人にはこれを差し上げます」

卒業の証である、《アバンのしるし》が、俺たちにかけられる。

「いいですか二人とも。私の戦いをよく見て参考にしてくださいね？」

「……別れの挨拶はすんだか」

「待っていていたんですか」

「まあ、またすぐに会うことになるわ。あの世でな！」

それからの戦いは凄まじいものだった。

先生の呪文をハドラーが打ち落とす。

ハドラーの拳を先生が払いのける。

剣撃が、拳撃が、呪文が、技が、幾度となく交わされる。

俺はいくらもがいても、その戦いに加わることが出来ない。

「くらいなさい！アバンストラッシュ！」

先生の必殺技がハドラーに決まり、吹き飛ばす。

「なかなかやるな！だが貴様の魔力は尽きかけている！貴様に勝機は無いぞ！」

「さあ、それはどうでしょう！」

そして、その時は来た。

先生の手から剣が吹き飛ばされ、ハドラーが勝利を確信する。

しかし、先生はそれにもかまわずハドラーの頭を掴む。

「！まさか！」

「……この呪文はほとんど魔力を使わない代わりに、術者の生命を以って敵を討つ」

「ばかな！貴様死ぬ気か！」

「終わりです、ハドラー！《メガンテ》！」

そして次の瞬間、猛烈な爆発が視界を埋め尽くす。

「さらばです、二人とも」

最後に、そんな声が聞こえた気がした。

「アバン先生……」

「先生……」

「アバン殿……」

俺たちは結局、何もすることが出来なかった。

「……くっくっく……」

そこに、暗い声が響き渡る。

「はぁーっはっはっは、耐え切ったぞ！アバン！」

「な？！ハドラー！」

「アバンめ、驚かせよって。だが、もうやつは居ない！」

「そうな、アバン殿のあの呪文を耐え切るとは……」

「ああ、貴様らも居たのだったな。いいだろう、師の下へ送ってやるう」

ハドラーは指にメラの火を灯す。

「俺のメラは地獄の炎。一度火がつけば消すことの出来ない炎だ」

「くっ、それじゃあアストロンが解けたら……」

「そういうことよ。さあ、絶望の表情を俺に見せる！」

「させる、かぁー！」

ハドラーのメラが放たれると同時に、ダイがアストロンを打ち破り始める。

(だめだ、このままじゃ間に合わねえ！このままじゃ、)

ダイが、殺される！

「させねえ！」

その時、ダイの目の前でメラが打ち落とされる。

六角形の、光る盾によって。

「なに？！」

「！今だ、アバンストラッシュ！」

「ぐあああっ！」

驚くハドラーは、ダイの放ったアバンストラッシュで両腕を切り落とされた。

「ぐうっ！おのれ、ただでは済まさんぞ！アバンの使徒め！」

そっぴい残して、ハドラーはどこかへと飛んでいった。

―数日後―

「ダイよ、本当に行くんじゃない」

「うん。きつとロモスの王様やレオナも待つてると思っから」

「大丈夫だつてプラスじいさん。俺がダイを守ってやるから、さ」  
先生が居ないのは悲しいけれど、それでも俺たちは前に進む。

「そうですな。その技があればの」

「そうそう、だから安心しろよダイ？」

「ったく、すぐポップは子ども扱いするんだから」

きつと先生もそれを望んでいるはずだから。

「しかたないだろ？本当にお子様なんだから」

「確かにのう」

「じいちゃんまで！」

ここから先も、困難が待ち構えているかもしれない。

「んじゃ、そろそろ行きますか」

「そうだね」

「気をつけるんじゃないぞ、二人とも」

それでも俺たちは歩み続ける。

「行つてきます！」

「いつてらっしやいー」

その先にあるものを目指して。

## 第五章 魔軍司令（後書き）

ここから少しずつ変化してゆくつもりです。

文才ゼロの身分で何を言っている、と思う方がいらっしやるかもしれませんが、なにとぞご容赦を。

## 第六章 魔の森（前書き）

ちよつと時間が空きましたが、なんとか作ることができました。  
相変わらず上手な文章ではありませんけど。

## 第六章 魔の森

デルムリン島を出発してから数日後。

「先生、ごめんなさい…、俺たちはもうだめかもしれない…」

「大丈夫だつてポップ。もう少しで着くからさ」

俺たちは森の中で遭難していた。

「相変わらずお気楽なことばっか言ってるじゃねえ！」

原因はダイの持っていた地図だ。

上にロモス王国、真ん中に森、下に海。

以前キメラに乗って行った時のものらしいが。

「とにかく、何とかここから出ないと本当に「グルルル…」って？」

後ろからのうなり声に振り向くと、そこにいたのは凶悪そうなモンスターだった。

「げえっ!?!」

「出たな!」

「つて、ちよつと待て!いきなり向かって行くなって言ってるだろ!」

もう何度目だろう。このやりとりは。

モンスターが出　ダイが突っ込んで行こうとする　それを俺が抱えて逃げる。

「だつて」

「だつてじゃねえ!無駄な殺生はすんな!」

確かにモンスターを見逃すのは良くないかも知れない。

だが、今すべてを相手にしていたら絶対に途中で力尽きる。

それではだめなのだ。

(その為にもどっかに拠点が無いとな)

このようにして俺たちは旅を続けていた。

「きゃあああつ！」

程近いところから聞こえる悲鳴。

俺たちがそこに駆けつけると、ちょうどモンスターが少女を襲うところだった。

「やべえ、ダイ！向こう！」

「わかった！はあつ！」

俺はダイに木のようなモンスターを任せると、狼のようなモンスターに向き合う。

「悪いが邪魔するぜ！メラミ！」

先手必勝、俺は火炎呪文を放つ。

炎がモンスターの体を包むと、そいつは気を失って倒れる。

「ちよろいぜ！つと、ダイ？」

向こうを見ると、ダイもモンスターを追い払ったところだった。

「終わったよ、ポップ！」

「よし、大丈夫だったか？」

襲われていた少女に話しかける。

「えと、あの、ありがとうございます」

「そっか、よかったよかった」

いまだ怯える少女をいたわるように頭を撫でる。

「ポップもやるときはやるんだね。さっきまであんなに逃げ回っていたのに」

「うつせえ、全部相手できないからそうしてたんだよ！」

そんなやり取りをしていたとき、背後に気配を感じた。

振り向いた先には、狼のモンスターが腕を振り上げていた。

「げっ、『マジックソーサー』！」

それを俺は光る盾で受け止めた。

そこに何者かのベギラマがモンスターにとどめを刺した。

「ちよつと詰めが甘いんじゃない？魔法使いクン」

「！誰だ！」

俺の返事とともに、そいつは木の上から降りてきた。

「いきなり来てどういうつもり……、え？」

抗議しながら突きつけた指の先は、とても柔らかだった。

「ちよ、何するのよ！この変態！」

その後何があつたか、俺にはわからない。

ただ、きれいな川岸で、光り輝く二人の誰かに追い返されたような気はした。

「あゝ、死ぬかと思った」

「大丈夫、ポップ！」

「ごめん、やりすぎたわね」

「お兄ちゃん大丈夫？」

目を覚ますと、心配そうな三人の顔が俺をのぞきこんでいた。

「大丈夫、って、さつきはすまんかった」

「あ、ううん。悪気が無いのはわかってるから」

俺が謝ると、女性も許してくれたようだ。

「あ、そういえば名乗ってなかったわね。私はマームでこの子はケイ。この近くのネイル村に住んでるの」

「そっか。俺はポップ」

「俺はダイ」

「ポップにダイね。よかつたらうちの村に来ない？」

「ホンかト？！よかつたあゝ、これで野宿ともおさらばだな！」

「結構迷ってたからね！」

「あ、アナなたち迷子だったのね……」

これが、俺たちとマームの出会いだった。

## 第六章 魔の森（後書き）

軽くオリキャラです。

ですが作品にはあまり関係してくる予定はありません。

あくまで風味付けみたいなものにする予定です。

## 第七章 遭遇（前書き）

仕事地獄から何とか抜け出しました。  
ようやく続きができました。

## 第七章 遭遇

「ふうん、ロモス王国に行く途中だったんだ」

「ああ。もつとも、地図がしつかりしていればとっくに着いているはずなんだがな」

「ちよつ、ポップー！」

あの後、今からでは町に入れないということで、彼女たちの村『ネイル村』に世話になることになった。

「でも結構危ないことになってるって話だよ？」

「そうかもしれないけど、王様を助けないと」

「俺もこいつをほつとくわけにもいかないしな」

「そっか。ま、二人とも結構強いから大丈夫かな？ つめは甘いけど」  
「ほつとけ」

そんな話をしていたとき、裾を引つ張られた。

「ねえねえ、さっきの光るのは何？ 魔法？」

「あ、それ私も聞きたい！ あれって何なの？」

……一瞬、答えに詰まる。

「あゝ、俺にもよくわからん。魔法じゃないことは確かだけだな。

少し前に自由に出せるようになったもんだけど」

「そうなんだゝ。ねえねえ、もう一回見せて！」

「おういいぞ。ほれ！」

俺はかざした手の先に六角形の光る盾を出す。

「綺麗ね」

「うん、オイラも出来るかな？」

「どうだろ？」

くロモス山中の洞窟く

つまらん。

いくら命令とはいええ、あのようなひ弱な国を相手にせねばならんとは。

もう少し俺の武人としての誇りをくすぐる強者はおらんものか。

「……クロコダインよ」

「む、ハドラー殿か。いかがなされた？」

「少々面白くない事があってな。それよりロモスはどうなっている？」

「ふん、俺が出るまでもない。配下にやらせているがあと一月もかからんだろっ」

「そうか、ならばこいつらを討つてほしい」

そう言いながら差し出された紙には、年端もいかない少年たちの顔が書かれていた。

「こやつらは？」

「俺に手傷を負わせた者たちだ。どうだ、やれるか？」

「ハドラー殿に手傷を？なればこのクロコダインにまかされよ！」

司令殿はそれを聞くと、満足気に頷いて立ち去った。

「くつくつく、ダイよ、ポップよ、この獣王クロコダインが相手だ！があっはっはっは！」

久しぶりに出会う強者に、俺は笑いがこみ上げてくるのだった。

くネイル村く

「ここが私たちの村、ネイル村よ」

「よかったあ、あ、母ちゃん！」

「ケイ！無事だったのね！」

向こうを見ると、綺麗な女性がケイを抱きしめていた。

「うん！マアム姉ちゃんとおのお兄ちゃんたちが助けてくれたよ！」

「そうですね、ありがとうございます」

「い、いいよ、別にたいした事をしたわけじゃないし。ね、ポップ」  
「そうそう。先生の『困っている人は助けるべし』って言うていたからな」

何せアバン先生の教えだからな。

「へえ、何だかアバン先生みたいに立派な人なのね」

「……ちよつと待ってくれ。今、『アバン先生』って言ったか？」

「ええっ！マアムも『アバンの使徒』なの?!」

「『も』って、あなたたちも？」

「おう、一応な」

「そうなんだ、ならうちに寄って行ってよ。色々アバン先生の話が聞きたいし」

「う、どうしようポ」うわあああっ!」ッブ?」

それほど離れていない所から聞こえた、恐怖に満ちた声。

「何?!」

「モンスターか?!」

「わかんないけど、行こうポップ!」

「しかたねえ!あんまり先に行くんじゃねえぞ!」

俺は村の人たちに避難するように声をかけてから、ダイの後を追った。

俺がたどり着いたとき、ダイはリザードマンらしきモンスターの前で倒れていた。

「こんなものか、つまらん」

同行してきたマアムにダイを任せ、俺は時間を稼ぐためにモンスターの前に姿を現す。

「ずいぶんご挨拶じゃねえか、デカブツ」

「ポップとやらか、待ちくたびれたぞ」

ダイの方を見ると、どうやら体が痺れているだけらしい。

俺はいつでも呪文を唱えられるように構えながら、モンスターの気を引く。

「生憎名前も知らねえヤツと約束した覚えはねえんだが」

「俺を前にして減らず口を叩けるとはな、俺はクロコダイン！『獣王クロコダイン』だ！」

「俺はポップ。ただのしがねえ魔法使いだ」

俺が名乗りを上げると、クロコダインはでかい声で笑った。

「がっはっは！ハドラー殿に手傷を負わせた強者が、ただの魔法使いとはな！」

「それほどのもんでも、つておい！」

俺が驚くのは無理もないことだろう。

マームが構えた銃らしきものは、ダイに向けて放たれていたのだから。だが、

「「え?!」」

次の瞬間、ダイは起き上がっていた。

「あれはひよつとして『キアリク』か？」

もしそうなら、あれは魔法を打ち出すものだろう。

「ありがと、マーム！」

「まったく、心配させんじゃねえよ」

礼を言いながらこっちに來たダイに、俺は拳骨を喰らわしていた。

「いたた、ごめんポップ」

「まあいいさ。それより、仕切りなおしといこうぜ、クロコダイン！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7431u/>

---

ポップの極楽大冒険！

2011年8月7日00時20分発行